

8 HCV抗体陽性者の長期的予後の

検討－輸血歴のある症例を中心として－

東京医科大学第4内科○佐藤壽志子、宮原健夫、額賀春彦、船戸英理、武井伸之、石田久人、比佐哲哉、櫻林 忍、吉益 均、斎藤利彦、芦澤眞六

C型肝炎ウイルス（HCV）抗体測定法の開発により献血者のHCV抗体スクリーニングが行われるようになったが、依然として輸血後肝炎の発生はみられている。我々は、平成2年3月～8月に本院でHCV抗体陽性と診断された183例のうち、輸血歴のあった97例（53.0%）について、臨床的に検討した。97例の内訳はほぼ正常20.4%、慢性肝炎38.8%、肝硬変36.6%（うち肝細胞癌合併10.1%）で、輸血後平均22.9年で慢性肝疾患の診断を得ていた。肝細胞癌発生までは輸血後平均32.4年であった。又、散発性C型肝炎ではトランスアミナーゼが持続遷延する症例が輸血後C型肝炎に比べ有意に多かった。